

## ダンスパーティー



「今年是不景気だね。いつもは百人くらいの申し込みがあるのに、まだ半分くらいしか申し込みがなくて」

市比野のホテルでクリスマスのダンスパーティーを十年も主催しているというS氏がぼやいた。生バンドの演奏で軽食も付いて四千円の会費とのこと。百人集まっても多少の赤字なので、今年は中止しようかと迷っていると言っ。炬燵の上の豆菓子をつまみながら夫が言った。

「いや十年の実績は大したものだよ。楽しみにしている人も結構いるんじゃないか。僕も友達を誘って行ってやるよ。そっだ、タキシードを着ていってやるわ」

「エッ」

私は目を白黒させた。結婚以来一人で結構あちこ

ち行ったものだが、ダンスパーティーだけは一度もなかった。夫は、会社勤めをしていた頃は二次会でキヤバレーなどにも行っていたようだが、チークダンスくらいがいいところだったと思っ。大体ステップを踏むなんて器用なことは出来ない、というより練習という努力は殆どしない人なのだ。

バブルの最盛期のある時タキシードを買って来た。出来合いで丁度ピッタリのがあったと言っ。

「定年後、海外にクルーズに行こっ」

現実的な女には、こんな夢のような買物をする男の神経は分からない。当時、私も女性としては高給を頂いていたので「へえー」と言っただけで、もっすっかり忘れていた。

S氏自らの努力と友人達の協力もあって、そのダンスパーティーは開催されることになった。ところがタキシードはあってもネクタイやシャツは買ってなかった。今となってはこんなものを買っつのもしんどいことであるが、物好きな私も夫に付き合っ鹿見島市内のデパートに行った。

夫はいいとしても私はどうしよう。あれこれ考えて三十年前の真つ赤な胸の開いたブラウスに黒のロングスカート、首にはチエコで買ったガラスのキラキラしたネックレスを着けることに決めた。一生身につけることもないと思っていた派手派手のアクセサリーも役に立つことになった。私と踊れる訳ではないが、壁の娯楽も数の内という訳である。定刻にホテルに着くとテーブルが決められていて、大半が坐っていた。私達のテーブルは、夫の友人の二組みの夫婦と東市来のダンスのグループであった。S氏の挨拶の後、バンド演奏とすらりとした美女の歌を聞きながら軽食を取った。いよいよダンスが始まった。夫の友人の奥さんは教室に通ったそうであらうで、軽やかに踊っている。私はすまして坐っていたように思っていたが、連られて立ち上がった。奥さんと気の合ったダンスをしていた夫の友人が、「足踏みダンスをしましょう」と言つて相手をしてくれたので、本当に足踏みのダンスをしたあとは夫と適当なチークダンスである。

思い起こせば私も数える程は踊ったことがあった。大学に合格した春休みに、従姉が自分の入っているダンスの会に連れて行ってくれた。東京大学医学部の若葉会であった。九段の会場は広がったが三四十人ほどだったろうか。名も知らぬ若き医学者の卵たちと三曲ほど踊った。私はただリードされるままに動いていた。素敵な従姉の彼に、私も胸はときめいたものの一回も踊らなかつた。女子大生の従姉は私の襟元の臙脂色のWのバツチを羨ましがった。しかし学校が始まると従姉たちとは疎遠になつてしまつた。

大学のクラスメートとはコンパこそ何回もあつたが、ダンスパーティーは四年間に一回もなかつた。ただ大学祭にホークダンスをやつたことがあつた。思ひ出すとレッドリバーヴァレーの曲が頭の中で回転を始める。

コンピュータの専門学校の卒業記念のパーティーも教室であつた。その頃は組んで踊ることはなくてデイスコというのだろうか向かい合つてステップを踏

むのだった。時折手をとつてくるりと回るのだが、無口で大柄な若者の手の冷たい汗が気持ち悪かった。囑託という形で就職して間もなく、夜六時から会社のクラブで課のダンスパーティーがあるという。私は四児の母であり、夜は学習塾を開いていた。しかし踊らずとも仲間として参加したかったので、都合をつけて夕食を済ませ、七時ころ会場に行った。十五畳ほどの洋間は照明を落とし、薄暗い中に赤青黄のライトがくるくる回っていた。

その頃の電算室は高度成長の真つ最中で、二十歳前後の若い美人のキーパンチャーが三十人ほどもいた。システム担当はエリート男性が十人ほどと女性は津田塾大の数学科卒の三十歳の才媛と三十六歳の私であった。ミニスカート全盛の頃のこと、若い娘たちは本当に可愛く、眺めているだけで楽しかった。ラストダンスになった。と、一番優秀と目されていたハンサムな主任に、グツと手を引かれた。

「僕と踊りましょう」  
押しつぶしたような声だった。スーパーバイザー

の素敵な彼女を差し置いて。私は粘りつくよつな課長の視線を意識しながらも彼のリードに身を任せた。多分その頃の私は自分の意識より外観は若かったのだろう。今では全くその反対で、気持ちこそ変わらないが、やはり孫の七人ともなれば言わずもがな、もって瞑すべし。

「私たちも新年のダンスパーティーを開きます是非来てください」

踊りの合間に活動家の農協婦人部長に声をかけられた。一月末に農協の二階で開催予定とのことである。私はこれといって予定もなかったのでOKした。前日副部長が切符を二枚持つて来た。二千元の会費は、もう立替えて支払い済とのことで、夫も付き合われることになっていた。渋る夫に上着を着せ、私はワールのワンピースを着て出掛けた。

平素は教室のようなガランとした農協の二階だが綺麗に紙キールで飾られ、蛍光灯にもカラーランプが掛けられて、精一杯の手作りの会場である。テーブルの上には、煮しめ揚げ物、炒めもの、おむすび

にケーキなど、これも全て婦人部員お手製の料理が並んでいる。音響照明は前述のS氏で、生バンドではないが懸命に活気をもり立てる。

さすがにお客は農協のご婦人が中心で、平均年齢は一寸上回っているようだ。男性は農協職員七八名の他は、お年寄りが四五人というところである。一寸気落ちしていた私達の前に坐ったのは、遅れて入って来たMBC学園のダンス教師で、きりりとした女性と男性二人であった。彼らはデモンストレーションを踊ったあと、後ずさりする客の手をとって適宜に教えてくれる。私にも一人の教師がマンボをもつ二人がブルースを踊ってくれた。マンボなんて左足を前・引く、右足を後ろ・戻すを繰り返せばよいらしい。出すのは左足ばかり、引くのは右足ばかりである。こんな簡単なものがダンスなんだろうかと思いつつも、前回の足踏みダンスよりは格段の進歩である。

夫は、テーブルの料理をつまみながらセルフサービスの焼酎片手に、農協職員と雑談して終わったが、

婦人部の方々の熱意に敬意を表してか、そんなにこ機嫌は斜めではなかったのほっとした。抽選で当たった手揚げとおむすびのお土産もあった。

来年は身近な年下の男性を誘って、にぎやかに参加しようと思っている。

